

新たな文化活動が積み重ねられて

東京都美術館 一九七五年

文・写真 松隈 洋 [神奈川大学建築学学部教授]

二〇二三年七月一日、久方ぶりに、東京の上野公園にある東京都美術館を訪れる機会があった。前回は、二〇一二年八月二五日、敷地東側の企画展示棟の改修を伴う丸二年間の本格的な改修工事の竣工後に行われた一般向けの建物ツアーの案内役を務めた時なので、十一年ぶりとなる。この時は、改修によって何がどう変わったのかをその場で初見して解説する慌ただしい役回りであったため、落ち着いて観る余裕はなかった。



地下1階エントランス・ホール。北側へ拡張され広がった。



南側の正面アプローチからの全景。右側が改修された企画棟。

今回は、美術館の建築的な魅力を発信するアート・コミュニケーションのための勉強会「建築実践講座」の講師だったため、その前に、美術館に込められた考え方と改修の意図を一人静かに確かめる時間を持つことができた。また、この日は、それ以上に感慨深く思い出されたことがあった。それは、さらに遡る二〇一〇年四月三日、改修工事の着工直前に催された「おやすみ都美術館／建築講座―東京都美術館の魅力とは?」と題する

初の一般向けの建築セミナーで、建築評論家の長谷川堯（一九三七―二〇一九年）と、「前川國男の建築と東京都美術館」というテーマで語り合った対談である。なぜ村野藤吾の研究として著名な長谷川が前川を語るのか、と不思議に思われた参加者も多かったに違いない。けれども、筆者にとって、印象に残る忘れがたい催しとなった。

長谷川は、二〇〇八年、武蔵野美術大学教授を停年退職するにあたり、建築家に関する論考をまとめた著書二冊を上梓する。その中で、唯一の書き下ろしの長文で巻頭に収録されたのが、「論考―前川國男「告白」についての読み直し」（『建築の出自』鹿島出版会）である。どのような思いから前川論は記されたのか。そこには、長い前史があった。

最初の著書『神殿か獄舎か』（相模書房一九七二年）の中で、長谷川は、後藤慶二ら、「獄舎」建築に「自己の確立を求め、その内面的な深さを建築設計に体现させようとしていた」大正の建築家の再評価を展開する。この時、彼らとは対照的な「鬼子（おにご）」、すなわち、親に似ぬ手のつけられない「昭和建築の申し子」として、一九二八年に東京帝国大学建築学科を卒業した前川國男や谷口吉郎の名を挙げたのだ。なぜならば、前川らが目指す「合理主義」の建築は、明治から続く国家主義的な「神殿」建築として、「国家権力の組織的実利的発効のために容易に併合されてしまふ運命」と危うさを抱えていると思えたからである。おそらく、この眼差しが、長谷川を村野藤吾の評価へ導いたものだったに違いない。

しかし、その三六年後に書き下ろされた前川論では、『神殿か獄舎か』において、一九七〇年前後に隆盛を誇っていた「モダニズム」の一枚岩的な塊に対して、小さくてもいいからいくつかの風穴をあけ亀裂を入れない」と自らが放った「矢の先端は彼（前川）の建築家としての身体に届いていなかったのではないか」と自省的に記したのだ。そして、むしろ、前川が求めたのは、「生まれた土地の（言葉）、土地本来の、その土地の言葉を使った」「ヴァナキユラー建築」「それぞれの場所、風土に土着、密着した諸建築」だったのではないかと、そこに、対比的に見ていた村野とも共通する建築思想を読み取っていく。

こうして、長谷川は、前川論の末尾に、前川が、「自然環境と共生しながら、人間のスケールを持ち、人間の心が通う建物、つまり「建築」を、何らかの形で近代（現在）という時点において創りだそうと模索、苦闘する「建築家」だったと書き留めたのである。実は、こう記すことになる長谷川は、東京都美術館が岡田信一郎の代表作である東京府美術館（一九二六年）の建て替えだったため、その着工直前に、「近代建築が様式建築を打ち破って勝利をおさめる」という茶番劇はもうたくさんだ」（『新建築』一九七二年十一月号）と抗議の言葉を記していた。この記述からも、長谷川にとって、前川の建築をどう捉えるかは、長年の課題だったことが見えてくる。また、私事ながら、この二〇〇八年の長谷川の前川論は、筆者にとって、前川國男の戦前期の建築思想解明をテーマに格闘中だった

博士論文に最大の励ましを与えてくれた論考でもあった。だからこそ、待ち望んでいた対談であり、当日は、「前川さんは、自分の建築を通して、それを利用する人やそれを所有する人たちに何かを語りかけようとしているんだと思う」と語る長谷川さんの発言に、うなずくばかりだった。そして、その後、参加者と共に館内を巡りながら、美術館の大きな特徴であるロビーの天井を覆うアーチ状の重厚なプレキャスト・コンクリート板や、打放しコンクリートの骨太な柱と梁に施された職人の手作業による研り仕上げの質感について、楽しく語り合うこともできた。

さて、今回何よりも感銘を覚えたのは、この対談が起点となつて、二〇一二年から建築ツアーが館の事業としてスタートしたと聞いたことだ。その引率は、東京芸術大学との共同事業「とびらプロジェクト」で活動するアート・コミュニケーションの希望者が務め、「都美（東京都美術館）の「新しい扉（とびら）」を開く能動的プレイヤー」とびら」として巣立った修了生は三〇〇名を数え、建築ツアーを率いていたとびらには、前川の神奈川県立音楽堂や埼玉会館の発信活動に携わるメンバーもいるという。そして、長谷川さんとの対談を企画し、建築ツアーを立ち上げ、今回の講座で対談した学芸員の河野佑美さんは、長谷川さんの教え子でもあった。こうして、社会に開かれた発信活動の拠点として時を重ねてきたからに違いない。東京都美術館は生き生きとした現役感を醸し出していた。その姿に、遠く前川さんと長谷川さんを思う一日となった。